2017年4月30日・中野教会・聖書の学び

聖書箇所：ホセア書11:1-7、14:1-3

**「ホセア：主はイスラエルを愛す」**

　本日はホセア書から主の言葉を聞きます。ホセア書は12小預言書の最初の文書です。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルの四預言書を除く比較的小さな預言書を小預言書と言っています。12文書あります。その最初にあるのがホセア書です。12小預言書の中では最も親しまれた預言書と言っても良く、新約聖書の9か所でホセア書が引用されています。ホセアと言う名前は「救う」と言う意味の言葉です。この名前の人物は旧約聖書には多数でてきます。最も有名なのは北王国イスラエルの最後の王です。BC721年、ホセア王の第9年に北王国の首都サマリヤはアッシリアによって占領され、北王国は滅亡します。しかし、このホセア書の預言者ホセアは別人です。ホセア書1:1に彼の時代が述べられています。ホセアは北王国で預言した人物ですから北王国の王様で言うと、ヤロブアムII世の時代です。この王はエヒウ革命によってヤハヴェ信仰が復権されたエヒウ王朝の4代目の王です。エヒウ王朝は次のゼカリヤで滅びます。そのあとは短期の王が入れ替わり立ち代わり出てきて、最後はホセア王で終わりになるのです。ホセアは主にヤロブアムII世から北王国滅亡の直前頃まで預言をしたと思われます。ほぼ同時期に預言をしたのがアモス、イザヤ、ミカです。この4人の預言者が北王国イスラエルの危機の時代に登場したのです。

　このホセアが登場した時期の政治状況はいかがだったでしょうか。カナンの地域は以前から、エジプトとアッシリアという2大強国に翻弄されてきた地域です。しかし、この時期は、エジプトは勢力が衰え、このカナンの地域まで進出する気配はありませんでした。この十年後くらいにはエチオピア人に占領され、エチオピア人の王朝ができるまでになります。ちなみにこの時代、エチオピアというのは今のエチオピアのことではなく、エジプトより南のアフリカ全体を指している、と言われています。むしろ今のスーダンあたりのことであろうと推測されています。他方、アッシリアは勢力が強くなったり弱くなったりです。王の継承に伴う内紛が絶えなかったのです。ヤロブアムII世の頃は勢力が弱い時期です。王は領土を回復するとともに、国を経済的繁栄に導きました。よくあることですが、そのような時、信仰的には堕落した状態になりました。農耕神バアル信仰が蔓延したのです。これは豊饒神ですから、性道徳においても無節操でした。ヤーヴェ信仰から見ると全く許せない信仰的堕落でした。これは社会倫理の低下を意味しています。これが、預言者の指弾するところとなったのです。イスラエルの主なる神への信仰は当時で言えば信じがたいほどの社会的倫理性の高さを求める信仰でしたから、通常の国民は地場の豊饒神信仰に流れやすかったのです。これは今の日本についても言えることです。さてアッシリアでBC745年にティグラトピレセルIII世プルが王となると、彼はシリア、カナンの地に勢力を伸ばそうとします。当初、北王国、南王国ともにアッシリアに恭順の意を示していましたが、北王国最後から二番目の王ぺカはシリアと手を組んで反アッシリヤに転じます。南王国はアッシリヤの従属国に留まりました。このため南北イスラエルの関係が険悪になってきました。預言者ホセアの時代はここまでです。その後、シリアと北王国通称エフライムの連合は南王国ユダを攻めますが、ユダ王国はアッシリア王シャルマナセルV世に援軍を求めました。これによりBC721年北王国は滅亡しました。ホセアの預言にはこれをうかがわせる記述もあります。またユダ王国は滅ぼされはしませんでしたが、エルサレムが略奪され、散々な目にあいます。ホセアはヤロブアムII世の経済的繁栄・宗教的堕落の時代から北王国滅亡の直前までの預言期間です。イザヤ、ミカはもっと長く預言していました。

　ホセアという預言者は独特です。彼は神様より言葉を預かりそれを皆に告知する、という通常の預言者の活動を命じられただけではないのです。神様はホセアに極めて屈辱的な夫婦関係を強制するのです。まず、姦淫の女を娶ることを求められます。1:2に「行って、姦淫の女を娶り、姦淫の子らを引き取れ」と言われたとありますからおそらく姦通により離婚された女と結婚せよ、という事でしょう。しかも彼女には子供もいて、その子らも引き受けろ、という訳です。彼は、主の命令に従いました。女はゴメルと言いました。ゴメルは子供を3人生みます。2:2の表現からするとその3人の子も更なる姦通によって妊娠した子の様です。ホセアの子ではない、というのです。その三人の名前は、男の子イズレエル、女の子ロ・ルハマ、男の子ロ・アミと言います。それぞれの名前の意味は「神は種をまく」、「あわれみを受けない」、「私の民でない」ということです。あとの2人の名前は悪趣味のような名前です。長男の名前イズレエルというのはオムリ王朝二代目の偶像礼拝で悪名高い王アハブの妻イゼベルをエヒウが殺害した場所の名前です。いわば血塗られた地名です。長女・次男についているロというのは否定詞です。この否定的な出来事の記述の後、10-11節でイスラエルの回復が語られます。この1章のなかで、預言書の「裁きと滅亡、そして回復の希望」の構図が生かされています。10節でまず、「イスラエル人の数は、海の砂のように」多くなる、と言われています。これは長女の名前「あわれみを受けな」かったイスラエルが、「その日」即ち「主の日、終末の日」には、憐みを受け、多くの子孫に恵まれる、ということを意味します。また、「「あなたがたはわたしの民ではない」と言われた所で、「あなたがたは生ける神の子らだ」と言われるようになる 」と言われています。これは、次男の名である「あなたがたはわたしの民ではない」と名付けられたその地で、今度は「神の子ら」と言われる、というのです。11節では長男の名である「イズレエルの日」即ちあの忌まわしい殺人がなされた日が、一人のかしらのもとで、諸国の人々が集めらる大いなる日となる、と言うのです。3人のこの呪いが祝福に変えられるのです。

　ところが、ホセアの悲劇はまた繰り返されます。2:5にゴメルは「私の恋人たちのあとを追う」と言っていることが記されています。姦通相手の後を追っていく、というのです。どうもおいしい食事が沢山用意されているという幻想に振り回されたようです。ホセアは去るのを留めませんが、また破たんするだろうと、見ています。案の定、ゴメルは7節で「私は行って、初めの夫に戻ろう」と言います。8節からゴメルに対する罰について縷々述べています。しかしホセアは14節からその彼女に優しさを示します。そして、16-17節で「その日」にはゴメルがバアル信仰から完全に離れ、ホセアを「私の夫」と自分から言うようになる、と言っています。この2章も良く見ると「破滅的事柄そして回復の希望」という預言書のパターンがみられます。18-23節はいわば「神の国」の描写です。「その日」即ち将来の「主の日」に到来する世界の描写をしています。18節では「弓と剣と戦いを地から絶やす」と言っています。武器を持たず、戦争を根絶する、と言っています。このメッセージはミカ書、イザヤ書に受け継がれ、現代における戦争違法化の流れにまで繋がっているものです。イザヤ書2:4をお読みします。「彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない。」とあります。これこそ、日本国憲法第9条の目指している世界です。

19節には神様との新しい契約がでてきます。「神の子」となる契約です。その契約は神様の「正義と公義と、恵みとあわれみ」によってもたらされます。この４つはヘブル語では「tsedeq」「mishpa:t」「hesed」「ra:ham」で旧約聖書では神様の性質を示す言葉として最重要語です。これは即ち、キリスト信仰者の目標でもあります。「正義と公義と、恵みとあわれみ」です。21-23節も美しい表現です。お読みします。「その日、わたしは答える。－－主の御告げ－－ わたしは天に答え、天は地に答える。 22 地は穀物と新しいぶどう酒と油とに答え、 それらはイズレエルに答える。23 わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、 『愛されない者』を愛し、 『わたしの民でない者』を、 『あなたはわたしの民』と言う。 彼は『あなたは私の神』と言おう」。21-22節では「答える」（a:na:)という単語が5度でてきて韻を踏んでいます。主なる神は、22節で長男イズレエルに祝福を与え、23節では長女「愛されない者」を愛し、次男「私の民でない者」を「主の民」とする、とおっしゃいました。

　しかし、姦淫の女ゴメルとの話は是でおさまりません。3:1でなんと神様はホセアにこの姦通の結果迷い出た女を買い戻せ、と言うのです。2節の「銀15シェケルと大麦1ホメル半」というのはかなりの値段のようです。そしてホセアはもう過ちを繰り返さないように、と言います。そのあと頌栄のような表現があり、このホセアとゴメルと子供たちの話は終わります。このゴメルを買い戻すのは贖いです。私たちキリスト者はすぐ、罪の贖いのことを指していることが解ります。主イエス・キリストの十字架の贖い、ということの原型は旧約聖書の各所にあります。この話は、ホセアが神様の命令によって、経験せざるを得なかった話ですが、姦淫、姦通は他の神々、特にバアル信仰を指しています。偶像礼拝です。従って、このホセア/ゴメルの物語りは当時の偶像礼拝による主なる神への裏切り、にも拘らずこのイスラエルに恵みを示し、救おうとしている神、最後は罪の状況から脱することのできない民を贖う主の物語りなのです。ここで一言申し上げたいことがあります。私たちにとって偶像礼拝とは何なのでしょう。バアル信仰にも似たお供えをあげる神社の祭儀も偶像礼拝である、と言えるでしょうが、現代における最大のかつ強力な偶像礼拝は「お金」です。企業経営者が“会社のために“というとき、それはつまるところ「資本」というお金のため、ということなのです。株をもっている株主のためとか、働いている従業員のためとか、会社の経営陣や管理職の人間のため、とかではないのです。会社そのものが安定して、競争に勝ち、関係者皆が繁栄するためなのです。このように、良い事をしている、という意識なので罪悪感はないのです。しかし、会社はどんどん強くなっても結局関係者の幸せは向上しません。これこそ、マモン崇拝という偶像礼拝なのです。現在、この偶像礼拝が世間を蓋っています。競争によって敗者となり路頭に迷うことになる恐怖感がこれを支えている最大の要因です。余裕のあるひとはいろいろなところに寄付もしています。皆の幸せのために少数の人に犠牲になってもらわざるを得ない、という理屈もあるでしょう。はては個々人では子供のために財産を残してやらねばならない、という事情の人もいるでしょう。このようにマモン崇拝は罪と思わずこの偶像礼拝が行われるところが怖いところです。ホセアとゴメルの話を現代で考える時は、いかにわれわれはマモン教という偶像礼拝に染まっているか、を見る必要があります。おそらく、ホセアの時代、ヤロベアムII世のころに比すれば現代の方がこの偶像礼拝は深刻になっている、といえるでしょう。

　ホセアとゴメルの物語りは神とイスラエルの関係を指し示しているものです。旧約聖書では夫が神、妻がイスラエルの民を指しています。神様が姦淫の罪、即ち偶像崇拝に繰り返し落ち入るイスラエルの民を、にもかかわらず贖い、救うということを示している、ということです。悔い改めよ、立ち帰れ、という神様の声にもかかわらず、偶像崇拝、マモン崇拝から脱却できないイスラエルの民がここにあります。そのイスラエルを神様は擬制を払って買い戻す、即ち贖罪による救いを齎す、というのがこの物語の意味することです。どのような犠牲が払われるのかは明示されていません。これがイザヤ書53章における苦難の僕に繋がって行くのです。即ち、苦難の僕の自己犠牲が贖罪のいけにえ、となるのです。

　さて、ホセア書本文に戻ります。4章から10章までは当時の北王国イスラエルの腐敗、堕落の状況をいろんな角度から述べています。その結果、神の裁きが避けられない、ということが繰り返し述べられます。またその中で人間の裏切りを越えた神様の愛についても語られます。福音書でイエス様が引用している箇所を見てみましょう。6:6をご覧ください。「わたしは誠実を喜ぶが、 いけにえは喜ばない。 全焼のいけにえより、 むしろ神を知ることを喜ぶ」とあります。これは神様の恵みを裏切り続けているエフライム即ちイスラエル王国の人々に主なる神が語られた言葉です。「神を知る」とは知識の問題ではありません。神様の恵みを知り、これに応答する、というのが「神を知る」ことです。この節はマタイ福音書の9:13と12:7で引用されています。9:12-13をお読みします。「12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。 13 『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」と言われています。イエス様はホセア書のこの箇所を、具体的には罪人に福音、良き音連れを告げ、示すことだとおっしゃられています。それがホセア書で言う「神を知った者」のなすべきこと、だとおっしゃられているのです。もう一か所見ます。10:8です。お読みします。「イスラエルの罪である アベンの高き所も滅ぼされ、 いばらとあざみが、 彼らの祭壇の上におい茂る。 彼らは山々に向かって、 「私たちをおおえ」と言い、 丘に向かって、 「私たちの上に落ちかかれ」と言おう」と言われています。アベンというのはべテルの近くの町で偶像礼拝が盛んにおこなわれていた地と思われます。単語の意味としても「悪、偶像礼拝」のことです。「高き所」は祭壇でしょう。「いばらとあざみ」は荒廃した様を描写しています。これは最後の日の直前の描写です。預言という見地からは北王国イスラエル滅亡の時のことを指している、といえるでしょう。新約聖書ではルカ福音書の23:30、黙示録6:16に引用されています。ルカ23:30をお読みします。「そのとき、人々は山に向かって、『われわれの上に倒れかかってくれ』と言い、丘に向かって、『われわれをおおってくれ』と言い始めます」とあります。ホセア書10:8の後半部分の引用です。十字架に向かうイエス様が嘆き悲しむ女たちに、最後の日のことをおっしゃられた箇所です。これが黙示録6:16に引き継がれています。「山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ」とあります。もちろん、最後の日、終末の日、再臨の日のことです。この日は、最終的裁きの日ですが、主イエス・キリストによる、神の国の完成の時でもあります。このように、ホセア書4-10章は折に触れてほっとする箇所もありますがおしなべて、イスラエルの罪と罰について語られており、重苦しい気持ちにさせられる箇所が続いています。

11章に入って光が見えてきます。ここがお読みいただいた本日の聖書箇所の最初です。

まず、1-2節をお読みします。「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、 わたしの子をエジプトから呼び出した。2 それなのに、彼らを呼べば呼ぶほど、 彼らはいよいよ遠ざかり、 バアルたちにいけにえをささげ、 刻んだ像に香をたいた」と言われています。主なる神がエジプトの苦難から救ったのに今イスラエルは偶像礼拝・バアル信仰に走っている、と嘆いています。3節では「それでも、 わたしはエフライムに歩くことを教え、 彼らを腕に抱いた。 しかし、彼らは わたしがいやしたのを知らなかった」と言っています。ホセア書では罪にある民が悔い改めたので神様は恵みを施す、と言うのではないのです。どうしようもないイスラエルをそれでも歩くことを教え、腕に抱いた、とおっしゃっているのです。まさに母親が赤ん坊に対する時と同じです。一方的に愛が注がれるのです。そして神がイスラエルを癒したのをイスラエルは知らない、のです。赤ん坊は自分に愛が注がれているなど知りません。当然かの顔をしています。4節では「わたしは、人間の綱、愛のきずなで 彼らを引いた。 わたしは彼らにとっては、 そのあごのくつこをはずす者のようになり、 優しくこれに食べさせてきた」と言われています。この箇所はカソリックのフランシスコ会訳では「慈悲の紐や愛の絆で、わたしは彼らを導いた。わたしは彼らに対しては、赤子を抱え頬ずりする者のようであった」とかなり、意訳しています。この節の意味としてはその通りです。神様は罪の中に在るイスラエルに対し赤子に頬ずりするように対してくれたのです。しかし、しかし、それでも、5-6節でイスラエルは主なる神に立ち帰らない、と述べられています。もちろん、奴隷の地エジプトには戻らないがそのかわりアッシリアに占領され、アッシリアの王がイスラエルの王のようになる、というのです。アッシリアは軍事力をもってイスラエルを制圧し、家の戸締りのかんぬきもなきものとし、イスラエルが策略を図っても無意味に帰してしまう、と言っています。これも神の計画なのだ、と言わざるを得ません。そして7節でイスラエルの主への背信の現実を述べます。実はこの第7節は短い文章でできており解釈が極めて難解な箇所です。解釈によっては反対の意味にもなりますが、ここでは新改訳の訳で理解します。この1-7節では希望のあとに苦難がきています。ここまでが本日読んでいただいた最初の部分です。

　11:8からはイスラエルへの神様の愛が語られます。一か所だけあげます。8節後半から9節をお読みします。主の言葉です。「わたしの心はわたしのうちで沸き返り、 わたしはあわれみで胸が熱くなっている。 9 わたしは燃える怒りで罰しない。 わたしは再びエフライムを滅ぼさない。 わたしは神であって、人ではなく、 あなたがたのうちにいる聖なる者であるからだ。 わたしは怒りをもっては来ない」。12-13章では再びイスラエルの罪の指摘と最終的救いについて語られます。創世記、出エジプト記に記された各種物語の記憶をよみがえられます。新約聖書で引用されている箇所を一か所挙げます。13:14をご覧ください。「わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、 彼らを死から贖おう。 死よ。おまえのとげはどこにあるのか。 よみよ。おまえの針はどこにあるのか。 あわれみはわたしの目から隠されている」とあります。最後のところの「あわれみ」は動詞原型は「na:ham」でありこの語は悔いる、と言う意味も持っており、これを採用すると、「悔いることはわたしの目から隠されている」即ち、イスラエルを贖うことを「悔いることはない」という意味になります。すると、この節はイスラエルに対する祝福の言葉になります。他方、「死から贖う」を反語的疑問形と解すると、この節はイスラエルに対する裁きの言葉と取ることになります。ヘブル語は英語のように疑問文につくクエスチョン・マークがありませんので、解釈が難解になる場合がしばしばあります。わたしはずるいようですが、掛詞のように祝福と裁きの両方に解釈できるように書かれた文章ではないか、と推測しています。新改訳の訳は一貫していません。この節は新約聖書第一コリントの15:55に引用されています。「「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか」と書かれています。パウロは終末の主の日に永遠の命が勝利する、と言っています。従って祝福の言葉と理解しています。ホセア書のこの祝福の言葉も13章の最後で、ひっくり返ります。「サマリヤは自分の神に逆らったので、 刑罰を受ける。 彼らは剣に倒れ、 幼子たちは八つ裂きにされ、 妊婦たちは切り裂かれる」とあります。主の日はイスラエル救いの日であるとともに、裁きの日でもあることを指しています。

　14章、最終章であり、イスラエルの回復を歌いあげています。もう、裁きと祝福、祝福と裁きが繰り返し出てくるのがここで最終的に祝福、幸いの時となります。ここの1-3節がお読みいただいた第二の箇所となります。もう一度およみします。「イスラエルよ。 あなたの神、主に立ち返れ。 あなたの不義がつまずきのもとであったからだ。2 あなたがたはことばを用意して、 主に立ち返り、そして言え。 「すべての不義を赦して、 良いものを受け入れてください。 私たちはくちびるの果実をささげます。 3 アッシリヤは私たちを救えません。 私たちはもう、馬にも乗らず、 自分たちの手で造った物に 『私たちの神』とは言いません。 みなしごが愛されるのは あなたによってだけです」。第1節「主に立ち帰れ」の「立ち返れ」はヘブル語の「shu:b」の命令形であり、新約では「悔い改めよ」と訳される言葉です。マルコ1:15の「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」の「悔い改めて」はヘブル語訳では「shu:b」です。3節の「馬にも乗らず」というのは馬に代表される軍事力により頼まない、ということを指しています。「自分たちの手で造った物に「私たちの神」とは言いません」とは偶像礼拝をしない、ということです。当時ではバアル信仰を捨てることです。これらの子とは「みなしご」イスラエルはあまた、主に愛されており、この方のみにより頼む、ということです。12章以降は後世の追加である、という考えがあります。11章で一応完結していること、12章以降は11章までとかなり違っているからです。そうかもしれません。しかし、12章以降も11章までと、一体のものとして解釈すべきであるし、12章以降の著者もそのつもりで叙述したでしょう。

　ホセア書の言わんとしている事は14:1-3にあるように軍事力や偶像により頼むことをせず、主なる神にのみより頼め、それが主に立ち返ることであり、悔い改めである、ということです。これは新約の世界においても全くそのまま生きており、主イエス・キリストにのみより頼む、ということです。個人の信仰の次元で見ますと、軍事力に頼るとは自分の力を頼りにすることです。偶像に頼るというのはお金に頼ることです。これが罪の根本だと言われています。主により頼むことが悔い改めです。これは国家のレベルでも、人類のレベルでも同様である、とホセアは語っています。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のこのひと時を感謝致します。ホセア書の中から、主への裏切りにも拘らず、恵みを示される主なる神を示されました。どうぞお金という偶像によらず、主の力のみにより頼むものとさせて下さい。また軍馬という武力により頼まず、主なる神の力に頼む日本とさせて下さい。我らの救い主、イエス・キリストのみ名により、祈ります。アーメン）